

(様式第3号)

令和元年8月20日

議員視察報告書

赤穂市議会

議長 釣 昭彦 様

派遣議員氏名 瓢 敏雄 印

下記のとおり、行政視察・講演会等に参加しましたので、報告します。

記

- 1 実施日 令和元年8月5日（月）～6日（火） （2日間）
- 2 調査市及び主な調査項目（詳細については別紙のとおり）
 - 岡山県笠岡市（令和元年8月5日（月） 14:00～15:00）

項目 日本遺産「知ってる!? 悠久の時間が流れる石の島
～海を越え、日本の礎を築いた せとうち備讃諸島～」について

内容 ・これまでの経緯
・現在の市民の機運
・今後の計画
 - 広島県大竹市（令和元年8月6日（火） 8:00～11:00）

項目 平和への取り組みについて

内容 ・原爆死没者追悼・平和祈念式典について
・中学生交歓交流事業について

(別紙詳細)

岡山県笠岡市（令和元年 8 月 5 日（月） 14：00～15：00）

項目 日本遺産「知ってる!! 悠久の時間が流れる石の島
～海を越え、日本の礎を築いた せとうち備讃諸島～」について

内容 ・これまでの経緯
・現在の市民の機運
・今後の計画

目的

笠岡市は今年 5 月、「知ってる!! 悠久の時間が流れる石の島～海を越え、日本の礎を築いた
せとうち備讃諸島～」のタイトルで日本遺産の認定を受けた。

赤穂市はシリアル型での追加認定を受けた今年の「北前船」に続き、今年は「日本一の塩」
が単独型で日本遺産の指定を受けた。

笠岡市の認定を受けるまで取り組みや現在の市民の機運の盛り上がり、今後の計画を調査
して、赤穂市の取り組みに役立てたい。

視察内容

・これまでの経緯

平成 27 年度頃 笠岡商工会議所から「笠岡諸島を日本遺産に」との声が出始める。

平成 28 年 3 月 笠岡商工会議所商業部会にて「笠岡諸島を日本遺産認定を目指す」こ
と

に決定。

平成 28 年 6 月 市が文化庁との協議を進め始める。

当初は「単独」を目指していたが、協議の中で「シリアル型」を選択肢
とする等、いろいろな可能性を調査研究。（小豆島町は「石の文化で世界
遺産」を目指し活動中。）

平成 29 年度 石に関する文化として連携し、小豆島町、土庄町、丸亀市、笠岡市が「シ
リアル型」での取り組みを始める。

笠岡商工会議所商業部会にて「日本遺産認定に向けた会議」の開催等、
機運の盛り上がり広がる。

平成 30 年 1 月 「どっすん！石の島～海と山、巨石が呼んでる備讃諸島～」のタイト
ル

で申請。

平成 30 年 5 月 認定に至らず。

平成 30 年 10 月 2 市 2 町で「備讃諸島日本遺産認定推進協議会」の設立。

平成 31 年 1 月 「知ってる!! 悠久の時間が流れる石の島～海を越え、日本の礎を築い
た

せとうち備讃諸島～」のタイトルで申請。

令和元年 5 月 72 件の申請の中から 16 件の認定に至る。

・機運の盛り上がり

（ストーリーの概要）

瀬戸内備讃諸島の花こう岩と石切り技術は長きにわたり日本の建築文化を支えてきた。

日本の近代化を象徴する日本銀行本店本館などの西洋建築、また古くは近世城郭の代表である大坂城の石垣など、日本のランドマークとなる建造物が、ここから切り出された石で築かれている。

島々には、400年に渡って巨石を切り、加工し、石と共に生きてきた人たちの希少な産業文化が息づいている。

世紀を越えて石を切り出した^{ちょうぼ}丁場は独特の壮観な景観を形成し、船を操り巨石を運んだ民は、富と迷路のような集落を遺した。

今なお、石にまつわる信仰や生活文化、芸能が継承されている。

（日本遺産に認定されると）

日本遺産の認定を受けると、人材育成、普及啓発、調査研究、情報発信等に対して3年間の補助金を受け取ることができる。

（日本遺産による地域活性化）

認定はきっかけに過ぎず、一連の取り組みを自立的・継続的なものにしていく努力が必要である。力を合わせて、地域活性化を目指そうと市は呼びかけている。

日本遺産認定を機に、笠岡諸島全体、そして笠岡市全体を盛り上げる。

市民には、おもてなし、現地ガイド、その他、各種事業への協力をお願いしたいとしている。

（日本遺産推進室）

市は日本遺産の認定を受けて、日本遺産推進室を設置した。丸亀市、土庄町、小豆島町と連携しながら、全国に石の島の文化をPRしていく。

所感

駅、市役所、船のターミナル、市内の至る所に日本遺産ののぼりが設置されており、取り組みの高さや意気込みを感じた。

国からの補助金は2市2町の推進協議会が受け皿となり、協議会で事業に取り組んでいく。

日本遺産のパンフレットには、笠岡市版、全体2市2町の日本語版・英語版を現在のところ制作している。笠岡市単独のパンフレットには市内の構成文化財の一覧も記して、日本遺産ファンのみならず笠岡市の一般市民へのアピールも感じた。

シリアル型でも担当部署を新設するなど、まちの活性化につなげようとしている。

また、名刺について、担当の職員は日本遺産のロゴの入った名刺を作成、議会の議長はロゴのシールを名刺に貼っていた。

赤穂市にとってもせつかくの日本遺産の認定である、大切にしたいものだ。

赤穂市でも協議会を立ち上げた由、3年間と補助金の期限もあるかと思うので、速やかに事業計画を立てていってほしい。

視察対応者

松尾拓之産業観光部商工観光課参事兼日本遺産推進室長
浅野議会事務局長

広島県大竹市（令和元年 8 月 6 日（火） 8 : 00～11 : 00）

項目 平和への取り組みについて

内容 ・原爆死没者追悼・平和祈念式典について
・中学生交歓交流事業について

目的

赤穂市は市内の小学生を毎年、平和学習会で広島市へ派遣している。

また、非核平和展を開催して、原爆の被害や平和の尊さを伝えている。

大竹市で行われている平和への取り組み、原爆死没者追悼・平和祈念式典と中学生交歓交流事業を調査する。

今後の赤穂市の平和に関する事業について考えるうえで参考にしたい。

視察内容

（原爆死没者追悼・平和祈念式典について）

- ・原爆死没者追悼・平和祈念式典式次第
- 1. 開会
- 2. 平和の歌合唱
- 3. 献花
- 4. 原爆死没者名簿奉納
- 5. 主催者式辞
- 6. 黙とう・平和の鐘（8時15分）
- 7. 市長挨拶
- 8. 代表献花（遺族、被爆者、被爆2世、他）
- 9. 平和への誓い（玖波小、小方中、大竹高各代表）
- 10. 折り鶴献納
- 11. 「折り鶴」の合唱
- 12. 平和の歌、「伝える花」 遺族並びに一般参列者献花
- 13. 閉会

- ・原爆死没者追悼・平和祈念式典

(昭和 20 年 8 月 6 日、大竹市域の玖波村、小方村、大竹町が建物疎開等当番にあたり、989 人の地域義勇隊と学徒義勇隊が早朝より広島へ勤労奉仕に出て、原爆に遭遇し甚大な被害を被った。)

8 月 6 日、広島原爆投下から 74 年目の夏、午前 8 時より、大竹市原爆被爆者協議会による「第 37 回原爆死没者追悼・平和祈念式典」が行われた。

今年、新たに 35 柱の名前が死没者名簿に加えられ、慰霊碑に奉納された被爆者は 2,387 柱となった。

台風の影響で、当初予定されていた原爆慰霊碑「叫魂」前ではなく、総合市民会館ホールでの式典となったが、被爆者をはじめ遺族、市内小・中・高校の児童・生徒らが参列した。原爆投下の 8 時 15 分に黙とう、献花、折り鶴献納、児童・生徒から「平和への誓い」の作文朗読などがあり、原爆死没者への慰霊と平和への祈りを捧げた。

(中学生交歓交流事業について)

- ・実施目的

大竹市の中学生は沖縄県とみぐすくし豊見城市の中学生と「少年平和大使」として交流している。

平和学習、体験学習などを通して、広い視野と友情を深め、21 世紀に対応しうる地域リーダーの養成と青少年の健全育成を図ることを目的としている。

- ・事業開始年度

平成 4 年度 (1992 年) から、今年で 27 年目となる。

(大竹市の参加者は 210 人、延べ 404 人) ※2 年間は同一の参加者

- ・事業実施の経緯

平成 4 年度に豊見城村とみぐすくそん教育委員会 (当時) から大竹市教育委員会に対して、豊見城村青少年交流事業 (少年のつばさ) の一環として大竹市との交歓交流を実施したい旨の依頼があり、大竹市も事業の趣旨に賛同し開始されたもの。平成 4 年度は豊見城村の中学生 24 人を大竹市に受け入れた。翌年度は大竹市の中学生 24 人を豊見城村に派遣し、以後、相互に派遣しあうかたちで実施している。

- ・事業における「平和学習」

(大竹市受け入れ時)

「被爆慰霊碑 (叫魂)きょうこん」献花、大竹市の原爆被害についての講話、「広島市平和祈念式典」参列、「平和記念資料館」見学、語り部による「被爆者体験講話」、「原爆の子の像」千羽鶴献納など。

(豊見城市派遣時)

「平和記念資料館」、「平和記念公園」、沖縄戦に関わる施設の見学、沖縄戦体験者の講話など。その他、事前研修では大竹市に関わる戦争（原爆・太平洋戦争等）についての学習、沖縄戦についての学習を行っている。

事後においては、報告書の作成や報告会において、参加者が感じたこと・学んだことを考えたり、発表する機会を設けたりしている。

・「平和学習」の成果

参加者は「戦争と平和」に、より一層の広い視野と見識を持つことができる。

その経験は次世代の地域のリーダーとして、意識の向上につながっている。

(大竹市の戦中・戦後)

・大竹海兵団

昭和 16 年 11 月に呉海兵団大竹分団から大竹海兵団として独立、昭和 19 年のピーク時には関係者や潜水学校生をあわせると 2 万人近い人がいた。

原爆、その後 9 月 17 日の枕崎台風では広島県内で 3 千人の犠牲者が出る等あり、大竹海兵団 1 万 5 千人の解散は 10 月にずれ込んだ。

・海外からの引き揚げ

終戦当時、海外に日本人は、軍人・軍属 330 万人と民間人 330 万人、あわせて 660 万人がいた。この人々の引き揚げのため、初め横浜・浦賀・舞鶴・呉・仙崎・下関・門司・佐世保・鹿児島・博多の 10 引揚港があった。後に本格化して函館・横浜・浦賀・名古屋・舞鶴・田辺・大竹・宇品・下関・仙崎・門司・戸畑・博多・唐津・別府・佐世保・鹿児島の 17 引揚港となった。大竹港では第一陣として、昭和 20 年 12 月 10 日、氷川丸がフィリピン、ニューギニア方面からの引揚者を乗せて入港、昭和 22 年 1 月までに 410,783 人を受け入れた。

これは全国の引揚者の 6.8 割にあたる。

現在この場所は、ダイセル工業、三井ダウポリケミカル、日本製紙などの工場となっている。

所感

8 月 6 日に原爆死没者追悼式並びに平和祈念式典が、広島市以外で開催されていることを今回の視察で初めて分かった。また、広島市平和都市記念碑に奉納されている原爆死没者名簿にすべての犠牲者が登載されていないということも初めて分かった。

いずれにしても、そのまちに生きる今の人々が、礎となった人々のことを忘れず語り継いでいくことが重要であると改めて感じた。

大竹市では追悼式・平和祈念式典に児童生徒も参加、慰霊や平和への祈りを次世代にも繋ぐ努力をしているように感じた。

先の大戦を経験した人々から直に話を聞ける時間は限られている。

赤穂市で行う平和への取り組みを今後いかに推進していくか、さらに研究していきたい。

視察対応者

田中宏幸議会事務局長

柿本剛教育委員会事務局生涯学習課長

小松正二教育委員会生涯学習課社会教育係

中原悦司大竹市原爆被爆者協議会会長